
ワールドコード

A10

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドコード

【Nコード】

N6358Z

【作者名】

A10

【あらすじ】

自作サイト『螺旋ベীগール』にて連載している作品の、原稿です。サイト上ではゲームっぽい見せ方をしています

サイト上では第一話は完結済み、よければどうぞ！

<http://www.rasenbagerl.com/>

『ワールドコード』

超能力者を憎む主人公と、超能力を持つ少女の話

『狩野ESP研究所』 研究所とは名ばかりの、その研究所の裏の仕事は超能力者を狩ること……

「俺の犬になれ」

銃口を向けながら、彼は私に言った。

鋭く冷酷な目線、全てを憎むような真つ黒な瞳を向けながら、最後通牒のように彼は告げる。

私は、痛みで立ち上がることも出来ずに蹲ったまま彼を見上げ

そして、私は彼の猟犬になった。

File . 1 『正義の追跡者』 hypocritical
confidence

郵便物が回収される事無く、容量を超え、過剰摂取した食物を無理矢理吐き出すのを我慢しているような郵便受け、それでも零れ落ちたチラシや、元は何が書いてあったかも分からない紙が散らばり、湿り、擦りつけられて汚れた床、狭苦しいその空間に少女は立ち、階上につながる階段を見つめていた。

塗装の剥げた手すり、お互い半身になってすれ違うのが精一杯の細い階段、繁華街の裏のあやしげな雑居ビルの入り口、少女はいつものようにここを訪れ、そして普段訪れる時間とは違う空間の雰囲気に見入っていた。

時間は昼過ぎ、一日の大部分が日の届かない雑居ビルの中の短い日照時間。

細い階段の先の、人が二人立てるかどうかの狭い踊り場。

その壁にあけられた小さい窓、いまだかつて開けられた事が無いだろうその窓から差し込む光は空気中の埃を輝かせていた。

ントを見る機会も多く、それなりに美少女と呼ばれるものを見慣れてはいたが、それでも目を奪われずにはいられない、同じ人間とは思えないほど少女は美しかった。

少女は自らに注がれる視線を避けるように端に寄って、男達に道を空けた。

すれ違いざまに男達は少女を横目で眺める。

ある特殊な力によって他人の感情や雰囲気、視線や表情、その機微を感じやすい少女は男達が通り過ぎる間、体を強張らせてしまう。少女に視線を送る男達の目に映るのは、好奇、疑問、憐憫、愉悦、色欲。

場違いな少女に対する好奇心、なぜ、少女がこんな雑居ビルにいるのかという疑問、ビルの中に含まれる場所から推測される少女への哀れみ、可哀想な少女に対する優越感、声をかけることも憚られる美しさを持つ少女を舐め回すような視線。

それは、ぶちまけられた他人の中身が、返り血のようにこびりつく不快な感覚だった。

緊張による気持ちの悪い汗が少女の頬を伝う。

男達が通り過ぎた後も少女はしばらく動く事が出来なかった。

遠くで先ほどの男達が「まったく…金は出すって言ってるのによ」「しょうがないですよ、きつとイカしてるんでしょう」「死ね死ね死ね死ねシネ死ね死ねシネ死ね死ね」「そっいや、さっきの女の子…」などと愚痴を言い合っている声を聞いて、はじめて少女は緊張を解いた。

(…ぜんぶ、あいつのせいだ)

少女はゆっくりと息を吐き出すと、元凶のいる階上に向かって階段を上り始めた。

そして

『狩野ESP研究所』。

そんないかにも胡散臭い内容の看板が掲げられたドアの前に、少女はたどり着いた。

(たしかに、こんな所に用事がある人なんて、普通は頭がおかしい人だけだもんね…)

少女の名前は一条真名、この研究所の助手であり、道具であり獵犬。

『狩野ESP研究所』は研究所というより事務所に近い。

狭苦しい雑居ビルの一室、ドアをあけるとまず、いかにも座り心地の悪そうなクッションの薄いソファと応接セットがあり、右の壁は超能力関係と思しき研究書やスクラップブック、雑誌や、新聞が詰め込まれた本棚に占められ、左の壁は得体の知れないタイトルのついたグラフや悪趣味な色で塗り分けられた地図などが強迫観念にとらわれたように隙間無く貼られている。

部屋の奥には給湯室や仮眠室に続く薄いドアがあるが、その手前、応接セットとドアの間、入り口を開けてすぐ目に入るところに大きい事務机が置かれている。

その机の上に足を乗せながらけだるそうに、それでいて眼光だけは異常に鋭く光らせた男が性格の歪みそのまま現れたように口の端をつり上げ、真名に声をかける。

「なんでこんな時間にお前が来るんだ？まじめに学校通えよクソガキ」

「今日は午前授業だったの！サボったわけじゃないです」

「あんだよ、せつかく早く終わったんなら遊びにでも行きゃあ良いじゃねえか。別に待ってねえぞー」

「昨日、遅刻すんなって言ったのは狩野さんでしょ！」

「だからって早く来いとは言ってねえよ。なんだ？不器用か、お前は？ピッタリに来いピッタリに」

「っ、ああ言えば、こう言う！大体ピッタリって何時ですか！いつも学校が終わったら来てるし、時間なんて決まっていなくてしょ」

「おお！じゃあ、ちょうど今がぴったりか、偉い偉い。ご褒美にアメちゃんをあげよう」

「いりません」

返事を聞く前に男は真名に向かってぞんざいに飴玉を放った。

真名はそれを受け止めると、包装を破り飴玉を口に入れる。

「…結局、舐めるのかよ」

「なんか、文句でもあるんですか？…しかも、この味！なに？なにこれ？」

「きな粉味」

「おいしいですね」

おいしいのかよ…とうんざりした顔で男は溜息をついた。

飴玉の意外な美味しさに機嫌を直しつつも、真名は男を睨みつける。

手入れのされていない癖毛でボサボサの髪、まるでセットの様な目の下の隈と無精ひげ、安物のスーツをだらしなく着ているその様は真つ当な人間とは思えず、若者と呼べる年齢にも拘らず身に纏った退廃的な雰囲気、生気の無さの中で、目だけが獲物を狙う猛禽類のように光っている男。

他人を見下すような高慢な態度と、全てを馬鹿にし嘲るように歪んだ笑みを浮かべた男の名は狩野恭一、真名の上司であり、所有者であり、飼い主。

人を怒らせるのが、趣味みたいな男、それが真名の狩野に対する評価だった。

「さっきの…仕事の依頼じゃなかったんですか？どうせ、怒らせて追い返したんでしょうけど！まったく、たまには働いたらどうですか？」

『ESP』（extrasensory perception）超感覚的知覚、超能力の一種。

つまり、看板にでかかど超能力研究所などと掲げているこの『狩野ESP研究所』には当然ながら滅多に来客が無い上に仕事などほとんど無かった。

来客があったとしてもほとんどが興味本位の冷やかし、もしくは

妄想にとりつかれた自称超能力者だった。

それらの来客の事ごとくを狩野はろくに話も聞かず、馬鹿にし、怒らせて返してしまう。

したがって、狩野は一日中、研究所でダラダラ過ごし、真名の仕事もほとんどゼロに等しい。そのため、彼女はよく学校の宿題などをして過ごしていた。

「ああ、なんかTVのバラエティ番組の取材とか言ってたっけなあ」

興味無さそうに生気の無い声で狩野は答える。

「滅多に無い宣伝のチャンスじゃないですか」

「やだよめんどくせえ、宣伝なんてめんどくせえ事して余計な仕事が増えたりしたらそれこそめんどくせえ、それともあれか？お前TVに出たかったとか？美少女超能力者？なんつって、アイドルデビューでもする気か？バカか？パーなのか？」

「そんなつもりで言ったんじゃないやありません！」

冷やかすような狩野の言葉に、真名は怒気を含んだ声で答えるが、狩野はどこ吹く風で、落ち着けとやる気のないジエスチャーをした。余計に人を怒らせるような態度だったが、真名も慣れたもので、フンッとそっぽを向いて答えるだけに留めた。

「子供かお前は…いいんだよ、仕事なんかしなくたって、無駄に金使って赤字を出すのが俺らの仕事なんだからよ」

『狩野ESP研究所』はこの国どころか世界の中でもトップ企業である『天城グループ』の出資によって経営されている。

赤字経営の子会社を持つ事によって出資会社の税金が優遇される。つまり、税金対策のための、赤字前提で経営されているのがこの研究所だった。

真名は何度聞いてもよく分からなかったが、その度に「そういうことだからいいんだよ、俺も詳しい事はわかんねえし、どうでもいい」と狩野に言われるため、釈然としないながらも納得していた。

「それにしても、少しは仕事した方がいいと思うんですけど…お

金のためだけじゃなくて」

ダメ人間の代表の様な生活を送る狩野を見ていると真名は切実に思う。

「うるせえな、真面目ちゃんかお前は、学級委員か」

「…美化委員」

「いや、そういうことじゃないんだが、いいか？お前、この研究所見てどう思う？」

「胡散臭いです」

「そうだろ？だからいんだよ」

狩野は乾いた笑いをこぼして続ける。

「こんなうさんくせえ所に来るのはよ、真つ当な所じゃ相手にもしてもらえないような連中だ、つまり、頭のイカしてる連中か、もしくは」

そこでいったん区切ると狩野は腐ったコールトールのような憎悪に満ちた声を吐き出す。

「…本物の超能力者」

真名の全身に悪寒が走り、背中を冷や汗が伝う。

「か…狩野さん…」

真名の後ろ、研究所の入り口、来客を迎える事などほとんど無いその扉からノックの音が響いた。

「どうぞ」

狩野は畏にかかった獲物を見る様な狡猾な笑顔で答えた。

「…失礼します」

開いた扉の先には若い女性が立っていた。

年齢は二十台前半、スーツを着てはいるが着慣れている感じは無く、就活生か新社会人という印象を受ける。

「どうぞ」

狩野は立ち上がりもせず命令するように目の前のソファを指差した。

「はい…失礼します…」

ソファに腰掛ける女性を狩野は隙の無い視線で観察する。

肩に届かない程度の髪、黒いスーツの下は白いYシャツ、スカートは長くも短くも無い、化粧は薄くナチュラルメイク、真面目な優等生といった印象だが、就職活動中だとするならばそういった印象を与えるようにしているのかも知れない。

顔立ちが普通、少したれ目がちではあるが取り立てて特筆すべき点は無い。

目立つところの無い没個性的な女性だったが、狩野は一つ彼女の特徴を見つけた。

(こいつは餌だ)

無意識に狩野は口を歪め、その端から歯を覗かせる。

脳みそが赤黒く染まってしまいそうなほど暴力的な思考を常に巡らせている狩野にとって、人間は喰う側か喰われる側の二つに大別される。

喰われる側の人間の中でも特に犯罪に巻き込まれやすい人間、狙われやすい人間というものがいると狩野は思っている。

目立つわけでもなければ、特に何か行動したわけでもない、それなのに通り魔にピンポイントで狙われてしまうような人間、人の悪意を向けられやすい人間。

喰われるために生まれてきたような人間。

狩野は目の前のソファに座る女性をそう判断した。

緊張で強張る女性の瞳は、普段、研究所に訪れる人間のように病んだり欠けたりして狂気に染まったものとは違い、正気を保ち、強い覚悟に彩られていた。

(聞くだけ聞いてもよさそうだ…それに…)

狩野は来客と同時に、机の隣に移動していた真名の方に視線を移す。

真名は目を見開き、冷や汗を流して縛り付けられたように立っていた。

金縛りにあつたように体を強張らせ、ありえないものを見ているような、そんな表情をしている。

(コイツがこんなになつてゐることは本物の可能性が高い、少なくともそれ絡み…)

内心で牙を光らせながら、高まる期待を押し殺し、軽い口調で狩野は真名に声をかける。

「おい、ぼさあ〜と突っ立ってないで、客に茶の一つも出せつつの」

「え！は、はい」

まるで後ろから突然、声をかけられたように真名はびくりと体を震わせる。

「いえ！お気遣い無く…どうせ飲めませんから」

慌てて部屋の奥、給湯室に向かおうとした真名を、来客の女性は慌てて止める。

(飲めませんか…?)

狩野は、女性の妙な言い回しを聞き逃さなかったが、それよりも話を進めることを優先することにした。

「それで？今日はどのようなご用件で？」

狩野は姿勢を正すも、来客に対する態度とは思えないほど横柄に訊ねる。

「あの…実は…」

「ああ、いや、その前に、お名前をお聞かせください」

自ら質問しておいて、答える前に別の質問をぶつけて相手の話を遮る。失礼極まりないが、狩野が良く使う手の一つだった。

相手の出鼻を挫き、不快感を与える事で相手の心を波立たせ理性を乱す。そうして会話の主導権を奪う。

「あ…はい…私、枯庭雫と申します。あの…」

戸惑いながらも女性 枯庭雫は答え、遠慮がちに狩野と真名に視線を送る。

「私は所長の狩野恭一、こっちのガキは助手の一条真名」

今更聞くのか？と言わんばかりに狩野は気だるげに答える。

「…えつと…」

枯庭雫と名乗った女性は、戸惑いがちに真名の方を上目使いで窺った。

「ああ、あと裏にもう一人、主に情報収集をやらせてる引き籠もりの所員がいる」

「いえ、そういうことではなく…」

申し訳無さそうに雫は真名に視線を送る。

明らかに場違いな制服姿の少女を疑問に思うなという方が難しい。

「心配しなくてもこいつは使える」

当然ともいえる質問に、これ以上の説明はしないとばかりに、めんどくさそうに狩野は真名を指差す。

真名は狩野の方を見て、誰も、本人さえも気づかない程度に口元を緩ませ、雫の方に向き直ると小さく頷いた。

雫は疑うように、しばらく真名を見つめた後、何かに気づいたように目の色を変えた。

「そう…あなたも…」

雫は独り言のように静かに呟くと、覚悟を決めるように目を閉じる。

「兄を…止めてください」

なにかを堪えるように言葉を吐き出す雫の様子を、真名は気遣わしげに見守り、狩野は嬉しそうに眺める。

「止めてくださいって言われても、全く話が見えませぬねえ、訳がわからない！もっと詳しく、順を追って説明してもらわないと、私は超能力者じゃないんでね」

気持ちを整えるのを潰すように、その間すら惜しいと言うように、狩野は話の続きを急かす。

「…二ヶ月前に一件、先月に二件、殺人事件があったのを覚えていますか？」

「人はいくらでも死ぬし、殺人なんてそこらじゅうで起きてる」

「二ヶ月前は長野、先月は茨城と東京…ニュースにもなっていました…」

「ああ？すぐには思い出せねえなあ。で、その殺人事件がどうしました？」

「ニュースにはなってますが、その三件は連続殺人で…」

「その犯人が、あなたのお兄さんだと」

「……はい」

唇を噛み締め、雫は頷いた。

消え入りそうな、それでいて強い意志の籠った雫の声を聞いて、狩野は椅子の背に体重をあずけ天井に向かって溜息を吐く。

「なるほど…その話が本当だとして」

「本当です！」

「本当だとしてだ、何故うちに来る？殺人犯を捕まえるのは警察の仕事だ。しかも犯人がわかってる、簡単な仕事だ」

「警察には…警察では兄を捕まえる事なんてできません」

「おいおい脳みそ沸いてんのか？うちは興信所じゃなく『研究所』。犯人を捕まえたりはすんのは仕事じゃないんですか？」

「警察に協力してもらえただけでもいいんです。居場所を通報するとか…情報を提供するとか…それに…聞きました」

そこまで言うと、雫は深く息を吸い込み、深淵を覗き込むように、墮ちる一步を踏み出すように、禁忌を、言ってはならない事実を口にす。

「この『研究所』は…超能力者を”狩って”いると」

その言葉を聞いた瞬間、狩野の顔は、およそ醜悪というものを越えた、凄惨な表情を見せた。

しかし、すぐにそれを消すと狩野は雫に向かいなおす。

「まずはお兄さんの事を聞きましょうか。ああ、名前とか」

「兄の名は、枯庭豊、とても正義感の強い兄でした」

「正義感の強い人間が連続殺人？酷い矛盾だ」

「兄は悪人が分かると言っていました。害悪をもたらす人間、裁

かれるべき人間が兄には分かると」

「とんでもない誇大妄想だ。裁かれるべき人間？何様のつもりなんだよ」

「私も…そう思います。ですが、本当なんです！それがここにきた理由です」

「超能力で悪人を殺しまわっているとも？」

「はい…これはまだニュースにはなっていない事なんです、先月、先々月と殺された三名はいずれも殺人や強盗、凶悪事件の容疑者です」

「どういうことだ？枯庭豊の力と何の関係がある？」

「兄の殺した三名は容疑をかけられていながらも警察の手を逃れ、今まで足取りが追えず、事実上、捜査が止まっていた人たちです」

「枯庭豊は超能力でそいつらを見つけ出して殺した」

（今まで誰にも見つけられなかった人間を見つけて出して殺す。裁かれる人間を裁く…か、確かに不可思議だ。しかし、超能力によるものといえるかどうか…悪人が分かるというのであれば一応、説明はつくか…）

狩野が考えを整理するために黙ると、雫は応接セットのポロテールの上に封筒を置き、わずかな沈黙の間に逃げ出そうとするように席を立った。

「私の全財産です。相場は分かりませんが、100万はあると思います。」

だから、お願いします。と雫は深く、頭を下げる。

「そんなに受け取るわけには、それに全財産って」

真名が慌てて声をかけるが、顔をあげた雫は少し哀しそうに微笑んで首を振った。

「いいんです、私にはもう必要の無いものですから」

そう言っって背を向けた雫に真名は何も言う事ができなかつた。

「ちよつと待て、なに言いたいことだけ言っって帰ろうとしてんだ？あ？俺は引き受けるなんて一言も言っってねえぞ？」

狩野は無感情な声色で雫の背中に言葉を投げる。

「…あなたは必ず引き受けます」

振り返ることなく告げられた雫の言葉に狩野は舌打ちを返す。

「それにしたって、話はまだ終わりじゃねえ、枯庭 豊の潜伏先は？居場所に心当たりは？」

「わかりません…二年前から兄は消息不明です」

帰るために研究所のドアを開けながら答える雫に、狩野は食い下がる。

「さつき、ニュースになってない事って言ってたな？なんでそんな機密事項を知っている」

「…分かるからです」

振り返った雫の頬は涙で濡れていた。

やるせなさを滲ませた声が雫の口から零れ落ちる。

「兄は正義感の強い人でした。兄は許せないんです。罪を犯しながら裁かれない人たちが、犯罪者が、憎くて憎く憎くて堪らないんです。殺したくて、引き裂きたくて、磨り潰したくて、消し去りたくて仕方ない…二年前、私が殺されてから、ずっと、兄は私の復讐をしているんです。どうか、どうか馬鹿な兄を止めてやってください」

頬を濡らしたまま、強がるように笑うと彼女はドアの向こうに消えた。

「ちよっ、待てこら！」

雫困気に飲まれていた狩野は、ドアが閉まる音で我を取り戻すと急いで雫の後を追う。

しかし、ほとんど蹴破るようにして開けたドアの向こうには雫の姿どころか、階段を降りる足音も無く、およそ生き物の気配というものを感じられなかった。

2年前、私が殺されてから…

狩野は背筋に悪寒が走るのを感じた。

冷や汗が頬を伝うのがわかる、喉が渴いて唾が通らない、肌を張

り付く服が不快だ、止まったように音を立てない心臓、目の前に見える薄暗い空間は本当に見慣れたいつもの雑居ビルの空間なのだろうか。

「やっぱり、幽霊だったんですね」

突然、後ろから声をかけられて、思わず狩野は一瞬、体を硬直させる。

「…あれ？びびった？今、びびりました？…って、ひよつとお、はなふままないでくらはいよ！」

「……」

ニヤニヤという擬音が聞こえてきそうな表情で顔を覗きこんできた真名の鼻を、狩野は無言で摘まむと封筒に入っていた札束で頬を張った。

「ふえええ」

妙な声を上げる真名に狩野は札束往復ビンタを繰り返す。

「なに、アホなことやってんだコラ！どーやって死んだ人間が札束持ってくるってんだ？」

「ふへえ、はふう」

「幽霊がお礼を持ってくるなんて、古今東西よくある話だろ？」
「なんだか愉しくなってきた狩野に、部屋の奥から声がかける。」

研究所の奥、給湯室兼、仮眠室兼、情報収集をさせてる引き籠もりの所員部屋、その部屋の薄いドアが開かれると、中から西洋人の子供が姿を現した。

ミハエル「ブランケンハイム、年齢、十に満たないこの少年は天才と呼ぶには寒気がするほどの異常な情報収集能力と分析能力、集計、計算、比較、理解力を持ち、研究所の頭脳ともいえる存在として、研究所の奥に引き籠もっている。」

「馬鹿なことやってないで、コレを見なよ」

ミハエルはプリントアウトしたばかりの紙の束を狩野に手渡す。

「それを見ればわかるだろ？枯庭隼、彼女は間違いなく死んでる

よ

紙の束には、出生証明書、死亡届け、住民票から銀行口座、今まで通っていた学校全ての成績表、卒業文集、身体測定時のデータ、キャッシュカード、レンタルカードから無料のメンバーズカード全ての登録内容、考えられる限りの個人情報のコピー。

そしてその中には枯庭雫の殺害された事件の捜査資料までもが含まれていた。

「はっ、クソガキが！どこかの誰かと違ってちゃんと仕事をしてんじゃないか」

狩野は口の端を歪めて笑うと、赤くなつた鼻を押さえながら抗議の目を向ける真名を無視して捜査資料を読み進める。

「こないだ設置したカメラとマイクが功を奏したね」

ミハエルは研究所の天井に設置されたカメラを指差す。

研究所にはいたるところにカメラやマイクが設置されており、来訪者の映像や会話の内容が研究所の奥、ミハエルに送られるようになってる。

自称超能力者のペテンを見破る事もできるし、今回は得られた画像から個人を特定して情報を集める事ができた。

「あんな少しの間にこんなに集めたの？」

狩野が読み捨てるプリントを拾い集めながら、真名は感嘆の声をもらす。

「今はほとんどデジタル化されてるからね。僕の腕にセキュリティが追いつけるわけないし、それはとりあえずのデータ。細かいところや関連資料はこれから調べる」

たいしたことじゃないというようにミハエルは無表情で答える。明らかに違法な方法、主にハッキングで得られた資料を読み終わると、すぐに狩野は、携帯電話を取り出して、かけ始める。

「……ああ、高瀬か？先月と先々の事件で聞きたいことがある……そう、それだ、わけわかんねえとこがあるだろ？……ははっ、隠してんじゃないぞカスが……あ？タイピングが良すぎるって……

…ああ、そうか…協力してやる。迎えに来い」
携帯を切ると、狩野は二人の所員に告げる。
「お前ら、喜べ、仕事の時間だ！」
狩野は歯をむき出しにして狂喜した。

外からは何があつたかわからないが、中で何かがあつた事だけは誰から見てもわかる場所、頼りない黄色いテープが人の立ち入りを阻み、青いシートが入り口を覆つて視界を阻むアパートの一室。通りがかりに見ただけで築年数がうかがい知れるような外見どおりの部屋の中で一条真名は佇んでいた。

ところどころ剥がれた内装に生々しい手形が残る壁、変色した血液が染み込んでいる畳、捜査のための印が各所に設置された部屋の中を、真名は特に調べるわけでもなく、ただぼんやりと眺めている。まるで何も見ていないような視線で

人とは違う何かを見つめているような

見ているという表現自体が根本的に間違っているような

見ているというよりは視ている、視ている以上に観えている

それこそ異常に

真名の瞳は色を変えていく、黒から青へ、碧眼とも違う色合いに変わっていく、それは海の色をしていた。

それは、透明でどこまでも透き通る青、どこまでも透き通り見える筈なのに、一向に底が見えない海の色、崖から下を覗いたときの様に背筋が強張り、足から力が抜けてくような根源的な恐怖を呼び起こす畏怖の色へと変わっていった。

そうして部屋に立ち尽くす真名は、存在感が希薄で、それでいて部屋中に存在が拡散しているような不思議な雰囲気を漂わせていた。その後ろ姿を、二つの影が見つめている。

部屋と台所の敷居から真名を見つめる一つは、ポケットに手を突っ込みだらしなく壁にもたれかかり、もう一つはそれが自然体であるかのように背筋を伸ばして部屋の中を見つめている。

対照的な二人の男。

壁にもたれかかりながらも顔だけは部屋の方に向けた姿勢のまま、

狩野恭一は隣の男 微動だにせず直立不動の姿勢を保っている高瀬明に声をかける。

「悪いねえ、出来立てほやほやの現場から人払いしてもらっちゃってさ」

「貴様が天城の人間でなければ協力などしていない」

「だから、無理を通して申し訳ないねって言うてんじやん」

「謝罪の言葉は万分の一でもそう思ってから口にするんだな」

「ハッ、お前の手柄にも貢献してやってんだろ？それにしても捜査員を問答無用で追い出せるなんてどんな役職なんだよ」

「いつも言っているが機密事項だ」

「まあ、別に、お前が何々だろうが使えるんならそれでいい」

「同感だな。貴様に有効価値があればそれでいい」

お互い部屋の中の真名を見つめたまま、一度も視線を合わせずに会話を続ける。

「で？どうなのよ？捜査状況つてのはよ」

「進んでいるとはいいがたいな。殺害方法は絞殺、刺殺と統一性がない。前三件と今回の件でやっと被害者がいずれも量刑の重い指名手配犯であるという関連性が疑われる程度」

「刺殺や絞殺？」

「そうだ、貴様が期待するような特殊で不可解な方法ではない。

成人であれば誰でも可能な方法、それもプロではなく素人の犯行だ。時に被害者からの抵抗を受けている。ただし、恐ろしく計画的だ。

現場に証拠を残さないよう用意周到に計画され実行されている。それでも素人の犯行だ。所々で被害者の物ではない毛髪や皮膚、服の繊維などを遺留品として残している。鑑識にまわして調べさせているが何せ時間がかかる。決め手になるような証拠は出ていない」

「今の話だけなら、お前は俺を現場に入れたりしない。なにがある？」

「…一番の問題として被害者が特殊だという事だ。我々、警察が探し回っても確保できなかった指名手配犯をあっさり見つけ出し、

殺害している。現場の状況から、何日かにわたり、被害者を殺害する機会を伺っていたような形跡まである。次に、未だ目撃証言を得られていない。殺害方法は素人にも関わらず、目撃者を回避している。不審な音や声などの情報提供すら得られていない。まるで被害者以外が周辺地域にいないのを知った上での犯行に思える。情報提供者0など不可能に近い」

「はっはあ、なるほど？結局、何もわかってないに等しいって事じゃねえか。何やってんのよ」

「だからこうして現場に入れるようにしてやっている」

高瀬はちらりと視線を狩野に移す、その視線を横に受けながら、それでも視線を返さずに真名を見つめたまま、狩野はここに到るまでの経緯を説明する。

「つとまあ、死んだ後にも関わらず、妹がおせっかいにも、うちにそんな依頼をしにきたってわけだ。んな暇があるならとっとと成仏しろボケって話だが、最終的には消えたし、どうなったかは知らねえ」

「貴様の話が本当だとすると犯人は枯庭豊という名の男か」

「本当だって、俺は嘘を吐いた事がない生きる奇跡みたいな男よ？」

「本気で言っているなら精神疾患や脳の機能、特に記憶をつかさどる部分に問題が生じている疑いがあるな、いずれにしてもいい病院を紹介しよう。腕のいい医者に治療してもらえ」

「今回はホントの話だって、隠蔽も情報操作もなし、ありのままに赤裸々」

「そうだとしても、それだけじゃ参考程度にしかならんな。枯庭豊が犯人だとしても貴様の話だけで容疑者としてあげる事はできない。証拠ができれば別だが。貴様が提供できるのはそれだけか」

「それだけの事もわからなかった無能な集団には貴重な情報だとは思っけど、まあ、今のところはそれだけだ。だから真名を連れてきてやってる」

お互いに相手を値踏みするように視線を交わすと二人の男はすぐに視線を真名の佇む部屋に戻した。

「つまるどころ、一条君の力とはなんだ？」

高瀬の質問に狩野は言葉を選ぶように少し沈黙し、答える。

「俺も正確なところはよくわからねえ、ただ、俺達を感じられ無いものをあいつは感じることができ、俺達にわからないものが、あいつにはわかる。犬は人間にはわからない匂いを嗅ぎ分けられる人間には聞こえない音が聞こえる、そんなようなもんだ」

「つまり、嗅覚や聴覚などの五感が我々よりも非常に発達したものだということか」

「ああ、例が悪かったな。そうじゃない、そうだな一般的にいわれる第六感と別ものだが、五感とは違う六番目の感覚、俺達にはない感覚器官があるような感じか：実際俺はあいつじゃねえからわからんが、とにかく、俺達にはわからない事を感じとって違和感を調べられるつまり、もし、今回の場合でいうと枯庭の野郎が、俺達とはちがう特殊な、そう、超能力を使ったとしたらその痕跡を感じることもできるってこった」

「なるほど、虫の触覚や、蛇のピット器官、蝙蝠の超音波のような五感とは違う我々には無いものをもっているか。それで？違和感といったか？超能力使用の有無を調べてどうする」

「ああ、だから、その超能力の痕跡の手触りつつか感触？それを分析して上手くいけばどんな能力かわかる。上手くいかなくても追跡できる。それこそ猟犬みてえにな」

口の端を歪ませる狩野を横目で見て高瀬は独り言のように感想を呟く。

「違和感の把握：それをもとにした追跡：違和感を把握できるという事はそれ以外も感じる事ができる：漠然としている」

「わかりずれえんだよ、俺も何回か聞いて諦めた」

「が、興味深い：そうだな、まるで世界そのものを感じる能力と言えるか……」

高瀬の言葉に狩野は目だけを動かして、いかにも堅物といった表情の高瀬を見た。

腹の底を探るような狩野の視線にも高瀬は眉一つ動かさない。

「何だろつが構わねえさ、重要なのは俺にとってあいつは役に立つ。それだけだ」

吐き捨てるように言っつて狩野が視線を部屋に戻すと、視線の先では一仕事を終えたように真名が大きく息を吐いていた。

「で？どうだった？」

部屋から戻つてきた真名に狩野は問いかけた。

「え…つと…」

真名は口ごもりながら、ちらちらと高瀬の方を見る。身構える様なその姿は高瀬に対する緊張と迷いが見て取れた。ここで言っつてもいいのかと真名は雇い主である狩野に視線を送る。

「構わねえ、わかつたことがあれば報告しろ」

上司の許可を得て真名は狩野の方だけをみて報告を始める。

「えつと、普通とは違う流れというか雰囲気はこの部屋で感じられました。特殊な力が使われていたことは間違いありません」

「どんな能力が解るか？」

「いえ、今まで感じたことのない力の感触なので…ただ、犯人は見分けてます」

「例の悪人かどうかつてやつか？」

「違います」

真名ははつきりと狩野の言葉を否定すると言葉を探しながら報告を続ける。

「犯人、枯庭さんはある人がその人だとわかるなにかを追つてここにきてます」

「ああ？なんだそりゃ？」

「わかりません…なにかつてゆうのがなんなのかとか…」

「個人を特定できる何かか」

それまで黙って聞いていた高瀬が考えをまとめるように呟いた。

「ふん、持ち物から持ち主を探すサイコメトリーみたいなもんか」
狩野の言葉に真名は首を横に振る。

「わかりません。物の記憶を読むサイコメトリーとは別だと思えますけど、なにかまではちよつと…」

「能力まではわからない。でも枯庭はなにかを追ってきて指名手配犯を殺害した。奴が追跡系の能力を使ったのなら」

狩野は意地悪い表情を浮かべて真名に訊ねる。

「逆に辿って、追えるな」

訊ねるといふよりも確認するような狩野に対して、真名は無言で頷く。

「さて、狩りの時間の始まりだ」

もたれていた壁から背を離すと狩野は、凝りをほぐすように、筋肉を暖めるように、それが準備運動であるかのように首をまわして外に出た。

ここにもう用は無いとばかりに外に出た狩野に二人が続き、三人が外に出たところで真名が急に動きを止めた。

黒く戻っていた真名の大きな瞳が再度、色を変える。深海の様な群青に。

「狩野さん…見つけました…」

「ああ？何を」

真名は、すうつと少し離れたビルを指差す。

「犯人」

枯庭豊は全速力で階段を駆け下りていた。一刻も早くこの場から逃げ出さなければならぬ。メートルでもセンチでも一ミリでも離れなければならぬ。しかし、それでも逃げられるだろうか。いや、できない。彼は本能で理解していた。

例えこの場から逃げる事ができても、逃げ切る事はできないと数時間前、現場から少し離れたビルの一室に枯庭豊は戻ってきて

いた。指名手配犯を追い詰めるための拠点、悪を裁く機会を待った。あの夜の宿。

その部屋からは双眼鏡を使って、いつでも現場を見張る事ができた。

こちらからは常に監視する事ができ、向こうからは死角になっている。張り込むのには最高の条件を備えた一室。

彼がこの部屋に戻ってきたのには理由があった。念入りに掃除し、生活の痕跡を消した部屋に戻ってきたのは証拠を消すためではなく、殺人現場の捜査状況を見るためだった。正確には誰が捜査に関わっているか調べるために、この部屋から彼は現場を観察していた。

捜査員の一人一人を双眼鏡を使って確認していると、しばらくして、急に捜査員が現場から撤収を始めた。

捜査開始の時間から考えて現場から全員離れるなどありえない。遠くにうかがえる捜査員達の表情は一樣に不満げだ。何らかの、現場とはそぐわない指示がされたに違いない。彼がいぶかしんでいると数十分後に一台の車が現場に到着した。

枯庭は車から降りてくる人間を注意深く観察した。

一人はがっしりとした体格の警察幹部と思わしき男、もう一人はチンピラのようなだらしなく歩きながらも暴力的な雰囲気を含ませている男。その二人だけでも妙な組み合わせだったが、最後に車から降りてきた人物を見て枯庭はますます首を捻る事になった。

(女の子?)

最後に車から降りてきたのは歳若い女性、おそらく成人して無いであろう少女。しかも遠目からもわかる様な美しさを持っていた。殺人現場と美しい少女。

場違いで、異質で、奇妙な三人組は当然のように捜査員が消えた現場の中へと入っていく。

ブルーシートの中に入ってしまったわけてはこちらから中の様子を見ることはできない。彼は疑問を浮かべたまま三人組が出てくるのを待った。

一時間ほど経った後、ブルーシートをめくって三人組が外に出てきた。

待ち疲れてぼんやりと現場を眺めていた枯庭は慌てて双眼鏡を構えなおし身を乗り出すようにして視界を向けると

目が合った。

時間が止まったかと思った。

ブラックホールに吸い込まれる前、光速を越えて時間が引き延ばされるように、一瞬の時間が無限に感じられた。

少女の瞳の真ん中の瞳孔の奥の奥、この距離では見えるはずのないそこに吸い込まれた気がした。飲み込まれた気がした。

気づくと彼は部屋を飛び出していた。

こちらから一方的に観察し向こうからは死角になっている張り込むのには最高の部屋、向こうからはこちらに気づく事のない安全な部屋。その筈だった。

一方的に力を行使できる圧倒的に有利な場所から彼は逃げ出さざるを得なかった。そんな場所はもう無いのだと痛感させられた。

筋肉が引き千切られんばかりに足を動かし、呼吸する事も忘れて走りながら彼は理解した。

逃げる事でいっぱいの頭でなお、理解した。

これからは追われる立場になったのだと、自分が獲物にかわったのだと。

焦燥感が体中を抉りながらのた打ち回る。それなのに可能性が見出せない。これが獲物の立場、なんとという絶望感だろう。

しかし、同時に彼は歓喜していた。彼女の目を思い出す。尋常じゃない力を、異常な存在を、異質がゆえに同質な少女を思い出す。彼は何かを失って何かを得た。

絶望的な逃亡は、しかし、絶望そのものではなかった。

「四階の…二つ目ここからは見えない部屋」

ビルを指差しながら、真名は目を凝らすように声を絞り出す。

「高瀬！」

狩野が叫ぶ前に、高瀬は走り出していた。脊髓反射のように真名が言い終わるよりも先に高瀬は行動を起こしていた。

「あ……」

すでに姿が小さくなっている高瀬を追おうとした真名の肩を狩野が掴む。

勢いをそがれた真名が隣の狩野を見上げると端的な答えが返ってきた。

「今から行っても無駄だ」

諦めた様に振舞いながらも苦虫を噛み潰したような狩野の心の内を覗いて、真名は悲しい気持ちになった。狩野は追わなかったのではなく追えなかった。自分のせいで。真名はせめてふらつく足元をしっかりとしようと試みたが上手く力が入らなかった。

空は赤く染まらずに、ただただ陽を落としている。

もうしばらく経てば街灯も点り始めるだろう。

殺人現場の近く、薄暗くなり始めた公園のベンチに真名は俯きながら座っていた。

（体に力が入らない、手足の先が少し痺れてる気がする。貧血……少し違う。鼓動が聞こえない。血の引いた頭がじわりと熱い）

ふと、気を抜くと遠のいてしまいそうな意識を、いっそとばしてしまいたいと思う不快感の中、何とか保ちながら真名は自分の状態を確認する。

（生きてる心地がない……当てられちゃったか）

無理も無かった。先ほどまで大の男でも気分の悪くなるような場所ので能力を使っていたのだ。

真名の特異な能力が感覚であり、それによって得られる感触であるために、必然的により強い刺激をその身に受けることになる。

殺人現場 人が死んだ場所、殺された場所。

そこで感じられる全てが真名にとっては、より鮮明で、より克明

って、どこが微なんだよ、クツソ甘え」

「私がコーヒー苦手なの知ってるくせに……」

「っせえな、わかったよ奢りだ奢り。太っ腹な所長様に感謝して飲めよ」

苦手と言いながら嬉しそうに缶コーヒーを飲む真名を見て狩野が溜息を吐いていると、ふいに携帯電話が鳴り出した。

デフォルトの着信音、周りの迷惑を一切考えていない音量。

(なんですか、その着信音は…ダサッ)と表情で訴える真名にうつせえぞ、クソがっ)と目で応えてから狩野は電話に出る。

「ああ、そうか…やっぱ、向こうからは見られてたつてことか…なんかわかったら…ああ、お互いにな…今は近くの公園だ、お前、車で…いや、なんでもない、じゃあな」

狩野は携帯を閉じると気だるげに足を伸ばした。

「高瀬さんですか？」

「ああ、結局、枯庭のクソは捕まえられなかったつてよ、ただお前が指定した部屋に誰かいたのは間違いないらしい。簡単に借りられる単身赴任者用のウィークリーマンションを偽名で借りてたっばいな。まあ、何かしら証拠みてえのが出てくんだろ、奴は詰みだ…高瀬の野郎がすぐ捕まえんだろ」

「なんかやる気無いですね」

「まあな、超能力者つても殺害方法は普通、不可解な点無し！今回は高瀬の仕事だ。法律で裁けるからな」

そうは言いながらも、狩野が納得し切れていないのが真名にはわかった。

真名は狩野がいかに超能力者を憎んでいるかを知っている。特別な力によって圧倒的に優位な立場から一方的に振るわれる力、そして、それが当然の事であるかのようにその力を使う人間を狩野は心の底から憎んでいる。

それこそ、殺したい程に 枯庭豊が犯罪者を許せない様に、いや、それ以上の憎しみを狩野恭一は超能力者に対して抱いている。

内臓を焼け爛れさすような感情が、狩野の体中をゆっくりと巡り、怒りや憎しみを融解し、別の何かに変えて体中を満たしているのが真名にはわかる。

先の狩野の言葉に嘘はない。しかし、出口を無くした感情がドロドロと狩野の身体を蝕んでいくのが真名にはわかる。わかってしま

う。
「とりあえず、今日は解散だな。高瀬にお前を送らせようかと…お前、ほんとにそういうのだけはすぐ顔に出るな」

心底嫌そうな顔で眉をひそめる真名に狩野はあきれたように声をだした。

「…私…あの人、苦手です」

「あ？素で人のこと”貴様“とか言っちゃうからか？」

「それもありますけど」

「それとも一人だけ劇画チックだからか？」

「それもそうなんですけど…そうじゃなくて、あの方は陰謀というか、嘘と秘密がありすぎて何が秘密なのか…どれが本質なのか…わからないというか…あの方は信用できません」

真名の力は感じるからだ。真名は他人の気持ちを感じることが出来る。もし、その人間が嘘を吐いていれば、重要性やその種類、それがどれだけ偽装され、装飾され、粉飾されているかがわかる。しかし、嘘を見抜くことはできない。

真名は感じるができるだけで、心が読めるわけではない。

嘘を吐いてる事はわかってても、その内容までは真名には読み取ることはできない。

存在を認識していても説明できない。

真名にとって高瀬明という男は、その塊、むしろそのもので出来た化け物だった。陰謀と策略が人の形をしているだけ。

表は無くして裏しかなく光は無くして闇しかない。裏と闇と陰と影と虚と無によって形作られた硬質な人ではない何か。

「そうは言ってもあいつは有用だ。あいつが何を腹に抱えてるか

はしらねえが、せいぜい利用させてもらうぞ」

狩野は高度なゲームを楽しんでいるかのように歪んだ笑みを漏らすと、ポケットからクシャクシャになった一万円札を取り出して真名に渡した。

「少しは歩けるようになっただろ？今日はもういい、タクシーでも拾って帰れ」

狩野はそう言って缶コーヒーを飲み干すと、腰を上げて歩き出した。

「あの、私…」

呼び止めようとする真名に、ついてくるなとばかりに狩野は手を振った。

振り返ることも無く小さくなっていく狩野の背を見ながら、真名は力の入らない手でコーヒーの缶を握り締めた。

(胸クソ悪いが、あのガキに無理させるわけにはいかねえからな)
繁华街の路地裏を狩野は苛立ちながら歩いていた。

(あいつには、それこそ奴らを皆殺しにするまで役に立…あ?)

思考の途中で、右手の違和感に気づき狩野は立ち止まった。

右手に当たる風の感触がいつもと違う。ふと、目を落とすと指が増えていた。指の付け根から新しく指が四本、右手の指が計9本に変わっていた。

(あいつだ)

瞬間、狩野は精神干渉による幻覚を見させられていることを理解する。

ただ何が起こっているかわかっているからといって、それがありえない現象だったとして、それが現実ではないからと言って、足元から這い登る恐怖を抑えることはできなかった。

悪夢のように、意味もなく恐怖だけが膨らんでいく。

金縛りにあったように、手から目が離せない。

ふいに、新しく増えた四本の指が蠢いた。もともとの指と同じよ

うに感覚がある。皮膚が空気に触れる感覚。筋肉が収縮し、関節が曲がり、動きが骨に響く感覚。しかし、指は自らの意思に反して好き勝手に蠢き、虫のように這い回る。

声にならない声が口から出たのが狩野にはわかった。叫んでいるのに声が耳には届かず、ただ頭蓋を振動させた。

思わず、右手を振り払うように壁に叩きつけた。手が壊れてしまふほどの全力。事実、何本か骨の折れる痛みと感触があった。

その瞬間、あたり一面に泣き声が響き渡った。狩野が目を向けると壁が、一面、赤子の顔に変わっていた。

壁を埋め尽くす無数の顔、見分けのつかない赤子の生首が隙間無く敷き詰められ、そのうちの一つに狩野の指が突き刺さっていた。

血を流しながら痛みを泣き声に変える赤子に、呼応するように壁一面の赤子の顔がそれぞれ悲痛な叫びをあげる。

統一性の無い泣き声の洪水の中、赤子の顔に突き刺さった狩野の指は勝手に赤子の顔に侵入していく、指が瞼をこじ開けまだ視力を持たない目を抉り、柔らかい頬肉を爪に食い込ませて削り、小さい喉に突き立てられた指が血を吐かせる。その感触全てが正確に狩野に伝わる。

今度こそ、狩野は悲鳴を上げた。

恥じも外聞も無く、情けない悲鳴をなりふり構わずあげ続けた。

涙と汗と鼻水と涎で顔をグチャグチャにして、服が汚れるのも気にせず嘔吐した。

気まぐれに襲い掛かってくる幻覚による精神攻撃。

狩野が超能力者を憎む根本的な要因、植えつけられた原因。

幼い頃から狩野は断続的にこの精神干渉を受けていた。それは天災のように気まぐれながら悪意に満ちた人災で、公害のように一方的にもたらされる害悪だった。消し去るすべは無く、抗うすべは無く、訴える事もできず、耐える事すら許されない。

しかし、狩野は見える幻覚が毎回違っていて、垣間見える悪意は同一のものだと理解していた。幼い頃から、これが悪意をもって

もたらされている何者からかの攻撃なのだと理解していた。けして自分が狂ってしまったわけではないのだと　そして、狂った。怒りと憎しみと狂気に狩野は狂った。

（どこの誰かはわからない。何が目的なのかもわからない。だが、こいつは敵だ。必ず殺す。そして同じような、力を持った人間がいるはずだ。人智を超えた能力を持つ人間は一人残らず狩りつくしてやる）

そう狩野は決意した。

そして、今、再びその決意を叫ぶ。声にはならなかった。胃液で荒れた喉が血を出すに過ぎなかった。それでも、狩野は叫びながら天を睨みつけた。どこかの誰かに向かって、安全なところでほくそ笑んでるだろう見知らぬ連中に向けて、狩野は咆哮した。

しかし、まだ　勝てない。

狩野恭一は限界を向かえ、気を失った。

翌日、病院で目を覚ました狩野は、検査入院を勧める医師を無視し、手続きを済ませすぐに病院を出た。

昼前、幻覚の余韻でふらつく頭を押さえながら、狩野は研究所のドアを開けて、病院に戻りたくなかった。

「おい、学校はどうした不良娘、開校記念日とかクソなことぬかすんじゃないねえだろうな」

狩野が声をかけると、狩野の机の上に座っていた真名は別人のような表情を浮かべて笑った。

「うんにゃ、今日はサボり、かったりいし」

ニヤニヤと挑戦的な笑みを浮かべる真名に舌打ちして狩野は自分の椅子に座る。

「どけ」

「やだね」

机の上からどかさうとする狩野に対して真名は一度、机から降りたものの今度は上体を机の上に預け、狩野を覗き込むように顔を近

づける。

狩野の視界を占領する美しい顔は確かに真名のものではあったが、何もかもが普段の真名とは別の表情をしていた。

いつもは落ち着きを持った澄んだ瞳は好奇心に彩られた挑戦的な光を宿し、普段、微笑む程度にしかな動かない唇は自身の力を誇示するように大きく釣り上がっている。

服装も普段、肌の露出を出来るだけ抑えている真名からは想像できないような扇情的で露出の多い服装。髪型はポニーテールに変わり、なるべく人目につかないように隠している両耳が今日は惜しげもなく晒されている。

常に隠されているはずの両耳には無数のピアス穴が開き、様々なピアスが両耳を痛々しく装飾している。

その中の一つ、耳たぶにつけられた小さく赤い光を放つ大人しいものに狩野は目を留めた。

「おう、ちゃんとつけてんだなソレ」

狩野の言葉に眉をひそめると、忌々しそくに真名は答える。

「アタシは引き千切って捨ててやりたいぐらいだけど、真名の奴が誕生日にアンタから貰ったもんだから、喜んじゃってね」

「気に入ってもらえて何よりだ」

「そういうことじゃないんだけどなあ」

真名は呆れたように、馬鹿にした目を狩野に向ける。

「ああ？んだ？その目は、いいかお前が気に食わなからうがなんだろうが、そいつを常に肌身離さず身につけとけ、これは命令だ」

言い終わった瞬間、狩野は胸倉をつかまれて引き寄せられる。

「嫌でも、呪いみたいに耳に突き刺さってんよ！いいか？命令だ。アタシが出てくるような事をすんな！アタシを起こすな！呼び出させるな！わかったか？これ以上アタシの機嫌を損ねるなら……殺すぞ」

食い殺すような真名の視線を逸らすことなく狩野は受ける。

しばらくの間、お互い睨み合った末に、真名は突き放すように手

を離して立ち上がった。

「で？二ナ、今回お前が出てきた理由はなんなんだ？真名は何をへソ曲げてやがる」

狩野が声をかけると、研究所から出ようとしていた、二ナと呼ばれた真名は振り返って、コイツ何にもわかってねえとばかりに鼻で笑った。

「アタシは虫唾が走るけど、真名はね、アンタの役に立ちたいんだよ」

「あ？十分役に立ってんぞ？」

「はあ、わかってない。何にもわかってないねアンタは。ま、アタシにとっては都合か、アンタとなんか死んでもゴメンだし」

バーカ、と捨て台詞を残して、研究所のドアは閉められた。

「ったく、なんなんだよ」

結局、何も理解できなかった狩野はイライラを押さえつけるように頭を掻く。

（今回は備品が壊されることも無かったし、怪我もしてないだけまだマシか）

前回、二ナが現れた時の惨状を思い出して狩野は頭が痛くなった。「まったく痴話喧嘩は犬も食わないってね、いい加減イチャつくのはやめてくれないかな。せめて僕が巻き込まれないところでお願いするよ」

狩野が研究所奥の部屋に入ると、仮眠用のベットの上で身を守るように蹲っていた引き籠もりの天才少年 ミハエル「ブランケンハイムは開口一番、不満を訴えた。

「誰がイチャついてるって？なんだって俺があんなクソガキを相手にしなきゃなんねえんだ」

「ふん、日本人はみんなロリコンなんだろう？」

「こついう時だけ外国人づらしてんじゃねえよ、この東京生まれの国立育ちが」

「僕にとって国境なんて無いに等しいものだ」

「ああ、お前、部屋から出ないもんな。そりゃ、関係ないわ」

「いたいけな少年が変態上司に監禁されてる件…」

「なに、嘘っぱちの内容でスレ立てしてやがる」

「狩野なんか逮捕されてしまえ、その方が人類にとって有益だ」

「お前が勝手に居座ってるんだろが、むしろ不法占拠だ」

「フッフ、しかし、この状況を見て警察はどう判断するかな」

「それでも俺はやってない。つーか、お前たまには家に帰れよ」

「必要ない」

P Cに向かうミハエルの手が小さく震えているのが見えたが、狩野は無視した。

「で？なんか面白い情報はあったのか？せめて家賃分は働けよ」

「は、お釣がくるね」

ミハエルは大量の情報を次々に画面に映し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6358z/>

ワールドコード

2012年1月12日09時45分発行